

# 旅行記にみる井上円了の観光行動と交通利用について

堀 雅 通\*

## [要旨]

井上円了は、その生涯に国内外、実に多くの旅行をし、そのつど旅行記を著している。本論は、井上円了の旅行記によって観光旅行者としての円了、すなわち井上円了の観光行動を考察する。併せて、旅行中、円了が利用した交通手段・交通機関、すなわち交通利用について考察する。円了旅行記にみる交通利用、とりわけ鉄道利用の記述は、極めて正確、客観的で、当時の交通事情、鉄道利用の実態を知る上で貴重な史料・記録となっている。

円了の旅行は、国内については、大学、哲学堂創設のための、また修身教会運動のための講演旅行であり、海外については、世界各国の政治・宗教・教育制度の視察旅行だった。旅行記をみる限り、いずれの旅行でも円了は行く先々で「観光」を楽しんでいる。そのような円了の旅行は「楽しみを兼ねる商用旅行」、すなわち「兼観光」(旅行)だった。しかし、こうした旅行によって、円了は、広い視野と相対的なものの見方・考え方を身につけた。それは後年の円了の比較文化・文明論、あるいは思想形成にも影響を与えている。

[キーワード] 旅行、観光、兼観光、旅行記、観光行動、交通利用

## [目次]

1. はじめに
2. 『漫遊記』にみる観光行動と交通利用
  - 2.1 『漫遊記』にみる観光行動
  - 2.2 『漫遊記』にみる交通利用
3. 全国巡回講演にみる観光行動と交通利用—「館主巡回日記」と『南船北馬集』—
  - 3.1 「館主巡回日記」にみる観光行動
  - 3.2 『南船北馬集』にみる観光行動
  - 3.3 全国巡回講演にみる交通利用
4. 海外視察旅行にみる観光行動と交通利用
  - 4.1 海外視察旅行にみる観光行動
    - 4.1.1 『欧米各国政教日記』

---

\* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

- 4.1.2 『西航日録』
- 4.1.3 『南半球五万哩』
- 4.2 海外視察旅行にみる交通利用
- 5. 旅行記にみる円了の関心事
  - 5.1 交通
  - 5.2 月
  - 5.3 酒
  - 5.4 「不潔」と「怠惰」
  - 5.5 犬・鶏・蛙・蟬の声と蚊
  - 5.6 温泉保養と健康
- 6. むすび

## 1. はじめに

「旅」あるいは「旅行」とは、人が自分の家を離れて、一時他の土地、あるいは遠くへ行くことをいう。「ひとはさまざまな理由から旅に上るであろう……人生がさまざまであるように、旅もさまざまである……すべての旅には旅としての共通の感情がある」（三木清「旅について」）。「共通の感情」とは、「日常生活から解放される嬉しさ」であり、そこには「漂白の感情」、あるいは「旅の感傷」が伴う<sup>1)</sup>。また「観光」とは、(人が)「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とする」（観光政策審議会1995年答申）。すなわち、観光は、「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という3つの要素からなっている。このような観光の要素を備えた旅行として、「漫遊」「遊観」「遊覧」「交遊」などがある。こうした旅行にはいずれも「楽しみ」がある。本論は、「観光」を「楽しみのための旅行」(travelling for pleasure)と定義する。「観光」は「観光旅行」のことであり、「観光行動」と言い換えることもできる<sup>2)</sup>。なお「兼観光」とは「楽しみを兼ねる商用旅行」のことであり、また「商用旅行」は「仕事を目的とする旅行」(travelling for business)をいう。

井上円了は、その生涯に、国内外、実に多くの旅行をし、そのつど旅行記を著わしている(表1参照)。円了の旅行は、国内については、哲学、教育勅語の普及、そして大学の創設資金を募るための講演旅行であり、大学を退いた後は、国民道徳の向上、すなわち修身教会運動の一環としての講演旅行だった。海外については、世界各国の政治・宗教・教育制度の視察旅行だった。こうした旅行は、旅行記をみる限り、いずれも観光の要素を十分兼ね備えた、いわゆる「兼観光」(旅行)であった(とみることができる)。

本論は、そのような井上円了の旅行内容を、旅行記から分析し、円了の観光行動を明らかにする。これまでも円了の旅行記を分析した研究はみられたが、観光的な視点・観点から考察を加えたものはなかった。円了の旅行記に観光的要素を認めるにしても、それはあくまでも付随的なものと捉えられてきた。本論は、しかし、円了の旅行が、「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という(1995年「観光政策審議会答申」が定義する)「観光」の要素を十分兼ね備えた観光旅行であったことを明らか

にする。また、旅行中、円了が利用した交通手段・交通機関、すなわち交通利用についても併せて考察する。旅行記にみる交通利用、とりわけ鉄道利用の記述内容は、極めて正確、客観的で、当時の交通事情を知る上で貴重な史料・記録となっている。なお「観光」を目的とすれば「交通」は手段となる。

円了の旅行記は、国内の旅行記と海外の旅行記に大別される。国内の旅行記は、『漫遊記』『館主巡回日記』『南船北馬集』であり（表2参照）、海外旅行記は、『欧米各国政教日記』『西航日録』『南半球五万哩』である（表3参照）。これら旅行記を総称して、本論では、「円了旅行記」とする。以下、各旅行記の内容を検証しながら、井上円了の観光行動を考察する。具体的には、旅行の目的、行程、同伴者、旅行中関心をもった事物・事柄を分析する。換言すれば、円了はどのような旅行をしたか。旅行中どのようなものに関心を持ったか。どのような行動をとったかを検証する<sup>3)</sup>。

表1：円了旅行記関係年表

元号年	西暦	年齢	事	項
明治10	1877	19	東本願寺教師教校入学 → 『漫遊記』 (第一編) 「西京紀行」他9編	
明治11	1878	20	東京大学予備門入学	
明治14	1881	23	東京大学文学部哲学科入学 → 『漫遊記』 (第二編) 「房総漫遊」他9編	
明治18	1885	27	東京大学文学部哲学科卒業	
明治20	1887	29	哲学館創立	
明治21	1888	30	第一回海外視察旅行 → 『欧米各国政教日記』 (1889)	
明治23	1890	32	第1期全国巡回講演開始 → 「館主巡回日記」 (1891)	
明治26	1893	35	全国巡回講演終える。 → 『妖怪学講義』 創刊 (1893)	
明治35	1902	44	第二回海外視察旅行 → 『西航日録』 (1904) 「哲学館事件」発生	
明治39	1906	49	哲学館大学学長辞任、東洋大学に改称 全国巡回講演再開 (第2期巡講) → 『南船北馬集』 (1908) 修身教会運動、哲学堂の建設に専念。『日本周遊奇談』 (1911)	
明治44	1911	53	第三回海外視察旅行 → 『南半球五万哩』 (1912)	
大正8	1919	61	中国・大連で逝去	

出所：竹村 [2012] 40～43頁等を参照し、筆者作成

## 2. 『漫遊記』にみる観光行動と交通利用

### 2.1 『漫遊記』にみる観光行動

学生（東京大学予備門及び東京大学）時代、円了は「学苦ヲ除カント欲」（「再遊熱海記」107頁）し、「校牢ノ縛ヲ脱」（「寓居記事」106頁）するため旅に出た。学業が嫌だったわけではない。拘束される苦痛を嫌ったのである。むろん旅行にも様々な苦痛や障害が伴うが、そこには（心の）自由があった。円了は自由を求めて旅に出た。旅行記に自由という言葉はないが、旅には日常生活から

解放される自由がある。精神の緊張を解きほぐす効果もある。それが旅行の「嬉しさ」であり、「楽しみ」となる。生涯官途に就かなかつた円了は何よりも自由な生き方、自由な旅行をモットーとした。仮に官途に就いていたなら自由な旅行も自由な生き方もできなかったろう。

表2 旅行記の概要—国内旅行

旅行記題名	旅行(記)期間	旅行目的・概要	備考
『漫遊記』第一編	明治10年7月～明治14年4月(主として東京大学予備門時代)	東本願寺の命による上洛 在学中の余暇活動 帰郷・帰京、遊興	初めての単独旅行(「西京紀行」)、友人との旅行(「熱海紀行」他)、単独旅行(「銚子紀行」)
『漫遊記』第二編	明治14年7月～明治18年8月(東京大学時代)	在学中の余暇活動 帰郷・帰京、遊興	友人との旅行(「箱根客寓」他)
「館主巡回日記」	明治23年11月2日～明治38年8月1日	哲学、教育勅語の普及 哲学館創設資金の調達	『哲学館講義録』等に掲載。
『南船北馬集』(全16編)	明治39年4月～大正8年6月	国民道徳の向上、修身教会運動及び哲学堂創設資金の寄附金集め	「朝鮮紀行」(計3回)、「満韓紀行」、「台湾紀行」含む。第16編は遺稿集

出所：筆者作成

表3 旅行記の概要—海外旅行

旅行記題名	旅行(記)期間	旅行目的	旅行行程(訪問国名)
『欧米各国政教日記』	明治21年6月9日～明治22年6月28日(1年間)	欧米各国の政治・宗教・教育制度の視察(30歳)	アメリカ→イギリス→フランス→ドイツ→オーストリア→イタリア→エジプト→イエメン *日付、行程等の記載なし。調査報告書の体裁
『西航日録』	明治35年11月15日～明治36年7月27日(8ヶ月)	インドの聖蹟参拝、欧米の大学教育・経営、社会教育の視察(44歳)	インド→イギリス→ウェールズ→スコットランド→アイルランド→フランス→ベルギー→オランダ→ドイツ→スイス→アメリカ→カナダ *旅行中、「哲学館事件」の報告を受ける。
『南半球五万哩』	明治44年4月1日～明治45年1月22日(9ヶ月)	オーストラリア、南米など南半球を含む欧米各国の視察旅行(53歳)	オーストラリア→イギリス→ノルウェー→スウェーデン→デンマーク→ドイツ→スイス→フランス→スペイン→ポルトガル→ブラジル→アルゼンチン→ウルグアイ→チリ→ペルー→メキシコ *北極海観光に参加

出所：竹村 [2012] 40頁等を参照し、筆者作成

そのような円了は、学生時代、井上甫水著『漫遊記』と題する自筆本の旅行記を遺していた<sup>4)</sup>。『漫遊記』は、旅行の日時、天候、行程、利用交通手段、訪問地の風景、風俗・民俗、名所旧跡などの印象・所感を漢文訓読体で綴ったもので、2編（第一編・第二編）に分かれ、「西京紀行」、「筑波紀行」など、それぞれ10の小旅行記からなる。著名は「井上甫水」となっているが、いうまでもなく円了自身である。第一編の「漫遊」の時期は、明治10年（1877）6月から明治14年（1881）9月まで、経歴でいえば、新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）を辞して京都東本願寺の教師教校英学科に入学、東本願寺留学生として上京、東京大学予備門に入学し、卒業するまでの4年間である。第二編の「漫遊」は、東京大学時代、すなわち明治14年（1881）9月、東京大学文学部に入学、明治18年（1885）7月、同大哲学科を卒業するまでの4年間である。

『漫遊記』の旅行の目的・内容は、「漫遊」という題名が付せられていることから、当初から観光的要素を十分持ち合わせていた<sup>5)</sup>。すなわち『漫遊記』の旅行は「観光」（＝漫遊）であり、観光が旅行の主目的であった。「西京紀行」も東本願寺の命による上洛だが、円了自身にとっては観光旅行そのものだった（とあってよい）。

旅行中、円了は行く先々で様々な事物・風物を見聞するが、心にとまった風景、関心をもった民俗・風俗の印象や所感を簡潔な漢文訓読体で記している。ところどころに漢詩を挿入し、折々の感慨や旅情を詠み込む<sup>6)</sup>。漢詩の挿入は後年の旅行記にもみられ、円了旅行記の特徴の一つとなっている。筆致は極めて自由で、このようなスタイルは、その後の円了旅行記にも踏襲されていく。

『漫遊記』は複数の小旅行記からなるが、とりわけ郷里・長岡から京都までの（生まれて初めての）旅行内容を綴った「西京紀行」は、その後の円了の観光行動と旅行記の特徴を知る上で重要である。

「西京紀行」は円了旅行記の様式をほぼ完成させていたからである。実際、その後に書かれる円了旅行記の様式・記述スタイルは、晩年の『南船北馬集』まで基本的に変わらない。

旅行はいずれも学校の長期休暇（春・夏・冬休み）を利用して行われた。円了は休暇に入るとほとんど旅に出た。旅行はたいがい友人と一緒にだったが、ふいに思い立っての単独行もあった（明治13年4月の銚子行き）。江の島・鎌倉、熱海はよほど気に入ったのか複数回行っている。箱根には2ヶ月滞在した。円了は学生時代から富士山に憧れた。生まれて初めてみた富士山は神戸から横浜へ向かう船の中だった。以来、円了はしばしば富士山を目にし、その姿を写している。例えば、江の島から見た富士山は、「富嶽銀ヲ輝カス其妙筆硯ヲ以テ尽クシ難シ」（「江ノ島紀行」98頁）だった。箱根滞在中の明治14年夏には富士山に登頂する。その時の興奮を次のように記している。「湖上ヲ望メハ独り富嶽ノ蒼然トシテ碧霄ノ間ニ聳ユルヲ見ル顧テ昨遊ヲ憶ヘハ茫トシテ只夢ノ如シ」（「富士登行」113頁）。日光靈廟の「美麗」「彩光」にも目を奪われた。「本社ヲ礼拝シ靈廟ニ昇ル其美麗心ヲ奪ヒ其彩光目ヲ瞠シ称スルニ語ナク筆スルニ字ナシ」（「日光并奥州紀行」101頁）。円了は学生時代からよく温泉に行った。年末年始を温泉で過ごすこともあった。「浴場ニアリテ年ヲ送り……熱海ニ遊寓スルコト殆ト二週間ニシテ」（「熱海紀行」104頁）東京へ帰った。

旅行記には学業から解放された気持ちが素直に記されている。「七月校業已ニ終リヲ告ケ……余輩ノ如キモ始テ校牢ノ縛ヲ脱シ鞭撻ノ苦境ヲ去リ蠖屈ヲ伸フルコトヲ得タル」（「寓居記事」106頁）、

「閑地ヲ探テ学苦ヲ除カント欲シ同窓相伴ヒ熱海ニ遊フ」（「再遊熱海記」107頁）。友人と深夜、二子玉川界限を徘徊し、解放的な喜びを謳歌したこともある（「寓居記事」参照）。『漫遊記』には若い円了の生き生きとした学生生活の一端が窺われる。また円了が多くの学友たちと自由闊達に交際し

ていたこともわかる。

旅行中、円了は行く先々の主要な神社仏閣は必ずこれを参拝している。「西京紀行」では、長野「善光寺ノ開帳ヲ拝シ」（「西京紀行」94頁）、京都に着くや、まもなく市内の著名な寺社を参拝、京都滞在のほぼ1年間に多くの名所旧跡を回っている。「凡ソ余平安客舎ニ寓スル殆ト一年ニシテ其間拝観訪尋スル靈地旧跡一々掲クルニ違アラス」（「西京紀行」97頁）。「江島紀行」でも江の島に着くや、まず島内の江島神社と三社（辺津宮・中津宮・奥津宮）を参拝した。「旅装ヲ解テ廟ニ詣ス三社ヲ巡拝」（「江島紀行」98頁）。その他、鎌倉、日光、銚子、筑波、秩父など訪問地各所の社寺をこまめに参詣している。東京にいても主要な寺社はこれを全て参拝、記録に留めている（「府下遊処」参照）。

名所旧跡はおおむね通覧する程度で特段深入りすることはなかったが、著名な歴史的事跡に対しては時に関心を寄せることもあった。例えば、日光東照宮、会津の戊辰戦争などについては、その想いを幾分詳しく記している。また蟬、蛙、月といった後年の旅行記にしばしば登場する事物への関心も（蛙を除き）『漫遊記』に確認することができる。なお理由は不明だが横須賀の造船所を2回見学している。「造船所ヲ一見」（「江島紀行」99頁）。「横須賀ニ至テ造船所ヲ一覽」（「相州遊記」107頁）。「房州漫遊」ではたまたま友人と小学校で講演する機会があった。「村内ノ小学校ニ至リ學術演説会ヲ開ク來聴スルモノ二百余名余輩各々二題ヲ演ス」（「房総漫遊」115頁）。後年の巡講を彷彿させる。

旅行記全体にいえることは訪問地の風景描写が多いことである。風光賛美は円了旅行記の特徴である。円了は、旅行中、山紫水明に出会うことを最大の「楽しみ」とした。「湖上ノ風景尤モ雅ナリ」（「西行紀行」96頁）。伝統的な風景も自らの目でその美を確認した。苦しい徒歩旅行も風光明媚に触れることで報われた。「山溪ノ風光耳目ヲ娛マシムルコトアリテ更ニ旅行ノ艱苦ヲ覚エス」（「西京紀行」95頁）。「西京紀行」では木曾の溪谷美が円了の心を捉えた。（木曾の）「山水ノ風景ニ至テハ蓋シ之ヨリ富メルハナシ」（「西京紀行」95頁）。感動した円了は「天然ノ景色固トニ雅ナリ往還ノ人此景ヲ問ハスシテ過ルモノ多シ余景色ノ為メニ之ヲ悲ム」（「西京紀行」95頁）とまで記している。これは後年の以下のような記述を想起させる。（熊野の景観美を発見した円了は）「山水の美は木曾の勝あり日光の奇ありといへどもこれを熊野の奇勝に比すればはるかにその後に瞠若たるありさまなり……しかるに文人墨客のいまだその勝を天下に紹介せざるは、風景のために不忠の大なるものにあらずしてなんぞや」（12・126）。

旅は比較の視座を養う。各地の民俗・風俗について円了は記す。「松本ハ長野ニ競フ都会ニシテ市街繁盛屋宇梢、雅麗ナリ」（「西京紀行」94頁）。（京都は）「都会ノ都会ト云ヘシ……街衢縦横砥ノ如ク矢ノ如シ其風俗ヲ察スルニ言接巧美動作閑雅実ニ皇都ノ遺風アリ」（「西京紀行」96頁）。「此辺（房州根本村）土民ノ言語甚タ野鄙ニシテ都人ニ通ゼザルモノ多シ然シテ人情ニ至リテハ極メテ朴質ナリ」（「房総漫遊」114頁）。

旅は旅情・詩情を育む。円了はそれを旅行記に記す。「顧テ故郷ヲ望メハ已ニ米山ノ一脈ヲ隔テテ遥ニ雲天ノ外ニアリ遊子始テ他郷ニ入ルノ情ヲナス……今日ハ異郷ノ客トナル心ヲ傷マシム江上ノ客是レ故郷ノ人ニ非ス遊子ノ心中憶フヘシ」（「西京紀行」94頁）。心に留めた風景はこれを漢詩に詠み込む。「西ニ向フ途上五律ヲ得タリ……船中ニアリテ一絶ヲ得タリ」（「西京紀行」93頁）。詩情はもっぱら風物に向いた<sup>7)</sup>。そこに旅情を確認する。「去家十日到濃州。滿眼風光動客愁。身在晴天白雲外。山河千里思悠悠」（「西京紀行」95頁）。

旅では自然との出会い、「触れ合い」がある。円了はそれを「楽しみ」とした。「菜花正ニ盛ンニシテ残桃田園ヲ擁シ其趣譬フルニ由ナシ」（「銚子紀行」105頁）。人の心は活物である。様々なものに触れて発し、感じて動く。その機会・効用を与えてくれるのが旅である<sup>8)</sup>。「旅行して他郷にあそび、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすすぐ助となれり。是も亦わが徳をすすめ、知をひろむるよすがとなるべし」（貝原益軒『楽訓』卷之上）。

『漫遊記』に収められた小旅行記の題名には「遊記」「再遊」「漫遊」「遊行」「遊跡」「遊処」といった「遊」の字を入れた題名が多い。『漫遊記』の旅行スタイルは、題名通り「漫遊」であり、その目的は「遊興」「観光」にあった。「漫遊」は「自由な旅行」であり、「楽しみ」がある。束縛を嫌う円了にとって「漫遊」は自由そのものを意味し、自由こそは円了が最も重んじた思想だった。ただ円了の「漫遊」には「学び」と「触れ合い」（＝「交遊」）がある。「触れ合い」は人的ネットワークを形成する機縁となる。学生時代、円了は多くの学友と旅し、交流を深めた。

学生時代、円了の旅行は、帰省・帰京を含め常に友人といっしょだった。旅先でも学友を訪ね、行動を共にすることが多い。会津で学友を訪ねた円了は、「一笑一談時ヲ移」し、「共ニ（会津）城壙ヲ一見」した（「日光并奥州紀行」102頁）。「余輩井上ニ泊ス其夜旧友宮前謙二氏ニ面シ当地ノ実況ヲ伝聞ス」（「秩父遊行」126頁）。友人宅に泊まったこともある。「十一日栃尾又ヲ出テテ和田村ニ移り松木氏ノ宅ニ泊シテ十三日家ニ帰ル……二十三日又長岡ニ出テテ祝宴ニ連ナリ其夜野本恭八郎氏ノ宅ニ泊ス」（「帰省第四」129頁）。後年の巡講、海外視察旅行でも多くの人と旅先での交遊を深めている。「学び」も「触れ合い」も円了にとっては「楽しみ」となった。

以上、井上甫水『漫遊記』にみる円了の「触れ合い」「学び」「遊ぶ」旅行スタイルは観光旅行そのものだったといつてよい。

## 2.2 『漫遊記』にみる交通利用

旅行は交通の利用を伴う。近代的な交通機関が整備されていない当時の主要な移動手段は徒歩だった。『漫遊記』にみる移動手段の中心はいうまでもなく徒歩である。特定の区間のみ、汽船、人力車、馬車を利用した。新橋・横浜間にはじめて官営の鉄道が開通したのは明治5年（1867）のこと、鉄道は未整備であったからその利用は限られた<sup>9)</sup>。円了が初めて汽車に乗ったのは、明治11年（1878）4月、東本願寺の留学生として上京するときのことだった。京都から神戸までと横浜から新橋までの区間を利用している。「鉄車ニ駕シテ神戸港ニ到ル」（「東京紀行」97頁）。その後、新橋～横浜間の鉄道は、熱海や江の島・鎌倉へ行く際、利用するようになった。「寓居ヲ発シ鐵路ニ駕シテ神奈川ニ到ル」（「江島紀行」98頁）。

劣悪な交通事情の中にあっても円了は好んで旅に出た。旅行は旧街道筋を進むが、抜け道である間道も利用した。徒歩による移動は1日10里前後（約40キロメートル）だった。午前3時に出発したこともある。「暁三時客舎ヲ発シ燭ヲ提テ行ク」（「日光并奥州紀行」101頁）。夏は汗びっしょりで歩く。「此日熱天暑風背面汗珠ヲ躍ラス故ニ歩行大ニ苦ム」（「筑波紀行」119頁）。雪の日、大宮（＝秩父）に行ったが、道に迷い、「雪深クシテ脛ヲ没ス加フルニ人家ナク足跡ナク大ニ困艱ヲ極ム山溪ヲ出テテ三澤<sup>10)</sup>黒谷大野原ヲ過キテ大宮ニ入」った（「秩父遊行」126頁）。洪水で橋が流され迂回を余儀なくされたこともある。「橋架ノ落ツルアリ山背ヲ巡テ駅路ニ達ス」（「西京紀行」95頁）。「本道ノ橋梁悉ク雨ノ落ス所トナリ駅前ニ達スルコト能ハス」（「日光并奥州紀行」102頁）。暴風雨の中、

泥道を歩く。「午後風亦起ル満衣湿フテ将ニ滴レントス加フルニ泥深ク路悪ク歩行甚タ艱メリ」(「房総漫遊」114頁)。

時折利用する舟運や人力車(腕車)が歩行の疲れを癒してくれた。舟運の利用は乗船時間を休養や読書に充てることができる。漢詩も作った。「舟中ニアリテ偶然一絶ヲ得タリ」(「西京紀行」93頁)。舟運は意外に速い。「客船ニ上ル水満チ波急ニ舟行甚タ速ナリ」(「日光并奥州紀行」103頁)。利根川利用の銚子行きは夜9時に乗船、翌朝6時に着くというものだった<sup>11)</sup>。「夜九時半衆客ト共ニ上船シ輪行シテ銚子ニ至ル時已ニ六時天全ク明ナリ」(「銚子紀行」105頁)。琵琶湖の舟運も利用している。

「米原ニ発シテ湖船ニ上リ風ヲ負テ西走ス……大津ニ着岸ス……湖面十八里ヲ帆走セリ」(「西京紀行」96頁)。海上交通は国内留学のため京都から上京する際、神戸から横浜まで汽船に乗った(明治11年4月)。この時は海が荒れ、神戸港で4日間足止めを食った。「神戸ニ着シ滞在スルコト四日ニシテ五日午後六時汽船ニ上リ海程ニ就ク……遠州灘ニ罹リ風雨ニ逢ヒ船脚為メニ遅ク七日夜九時漸ク横浜港ニ着ス」(「東京紀行」97頁)。

人力車は現代でいえばタクシーの利用に相当する。疲労を覚えたときなどに利用した。熱海に行く際、藤沢から大磯まで利用した。(明治12年12月)「二十六日歩シテ藤沢ニ至リ車ヲ倩テ大磯ニ入り又歩シテ小田原ニ向フ」(「熱海紀行」104頁)。人馬の往来はその街の活気を映していた。「来往ノ人車先后織ルカ如シ」(「西京紀行」94頁)。人力車がない場合もある。「此日燃ルカ如シトイヘトモ駅ニ車馬ナク村ニ休亭ナク歩行甚タ労苦セル」(「日光并奥州紀行」101頁)。本郷から板橋まで深夜の馬車利用もあった。「帰省ノ途ニ就ク六日午前二時……東北馬車会社ヨリ馬車ニ乗シ板橋ニ至リ天漸ク明ク雨冷カニ風寒シ熊ヶ谷ニ至レハ雨全ク霽ル」(「北越遊行」116頁)。

以上のような学生時代の交通利用の経験は、後年の巡講にも活かされる。留意すべきは、円了旅行記にみる交通利用の記述が極めて正確、客観的で、当時の交通事情を把握する上で貴重な史料・記録となっていることである。

### 3. 全国巡回講演にみる観光行動と交通利用—「館主巡回日記」と『南船北馬集』—

井上円了はその生涯に3,578日にも及ぶ巡講を行った<sup>12)</sup>。円了は巡講の記録を簡潔な日記(旅行記)として公表している。旅行記は、当初、「館主巡回日記」として『哲学館講義録』などに収められていたが、大学を辞してからは『南船北馬集』(全16編)として刊行された<sup>13)</sup>。

#### 3.1 「館主巡回日記」にみる観光行動

「館主巡回日記」は、哲学、教育勅語の普及、そして哲学館創設資金を募るための講演旅行、すなわち第一期巡講(明治23年11月2日～明治38年8月1日)の記録である。「日記」(=旅行記)には、旅行の日付、天候、訪問地、行程、面会者の氏名が簡潔に記され、目的も明確だった。「明治23年11月5日 雨。朝、県庁へ出頭し、知事、書記官、参事官、学務課長等に面会す。午後、蜂屋師範学校長の依頼に応じ同校へ出頭し、教育将来の方針ならびに哲学館拡張の趣意を演述す」(12・11)。「午後六時、池田町高等小学において教育の必要を説き、あはせて哲学館拡張の旨趣を述べ」(12・32)。



講演目的が明確なことからも旅行記には巡講の使命感が漲る。講演で世話になった人々に対する気遣いも滲む。「当日この地にありて面会したるもの……また、当地にて周旋の労をとられたる者は左の諸氏なり」(12・17)。「今回巡回中、各地の有志者より一方ならず周旋尽力にあずかり、いちいちご厚意を謝するはずなるも、ご姓名を失念して意を達するあたはざるものこれあり、また右日記中に記載せざるものおよび記載中順次を失するものこれあり、疎漏の罪、深く謝するところなり」(12・26)。

巡講は多忙を極めたが、円了は行く先々で観光を楽しんだ。というよりも巡講の目的は観光にあったのではないかとさえ思われる。「今度の巡回は文人的漫遊にあらず、保養的旅行にあらず、哲学館および京北中学拡張の旨趣を報告し広く賛成会員を募集するにあり」(12・107)。ということは、ふだんは漫遊的・保養的旅行が多かったのではないか—。能登巡講の折にも、「余は巡回中に別に七不思議および八景と名づくべきものを得たれば、他日の笑い草までに左に掲ぐ」(12・108)として、旅行中興味ある見聞の一端を紹介している。ともあれ、巡講の合間、円了は様々な事物を見聞している。

「朝、柴原知事を訪ひ、公園に遊び、福原氏の宅において午餐を喫し、司獄官吏の懇親会に出席し、真行寺において仏教上の講演を開く」(12・38)。「午前、港内築港の実況を一見」(12・90)。「灯台を一覧」(12・123)。「製塩場を一覧」(12・149)。「午前、女学校、高等小学、尋常中学を参観し、かつ学校において演説をなす」(12・43)。「当日、捕鯨あり……(浜に)出でて鯨魚の解剖を見る。午後また捕鯨あり。その状、実に一大奇観たり」(12・86)。「午後、高等小学校において演説す……演説後、湯之峰温泉に入浴して帰る。同所には小栗判官、遊行上人の古跡」(12・120)があった。「午前、楽々園に遊び、城址に登り、金亀教校をたずぬ」(12・17)。「終日旅亭にありて宇和島行きを待つ。当所に温泉あり」(12・36)。温泉に入ったかどうかわからないが、温泉好きの円了の本音が窺える。

「館主巡回日記」には、「北海道論」(12・79～85)、「九州論」(12・94～100)、「能州巡回報告演説」(12・107～116)、「南紀巡回報告演説」(12・126～136)、「大和論」(12・183～185)といった、当該地方一覧の総括的な所感文が付されている。そこには円了の率直な感想と所見が記される。「余がここに北海道論と題するは、当夏期休暇中、哲学館拡張のため該道に漫遊し、その実地見聞せるところについて、いささか意見を述ぶるまでにして、決して堂々たる大家の高論を義とするにあらず。故にその論に入るにさきだち、余が漫遊の紀行について一言せざるを得ず。これすなはち本論の緒言なり」(12・79)。このあとキリスト教布教に対する強い懸念を述べている。「今この論を結ぶに当たり、更に一言を要することあり……北海道の各学校の徳育は、多くキリスト主義によると……余輩決してこれを黙然に付し去ることあたはず。余は北海全道の人民を代表して、口を極めてその非を天下に鳴らすことに猶予せざるなり……ひとたびその事実を明らかにして、他日更に論ずることあるべし」(12・84)。

以上、「余が漫遊の紀行」と称する円了旅行記には、しかし、円了の強い「学び」の姿勢がみとれる。また、抑制された文章には、円了自ら「漫遊」と称する巡講の観光的要素、換言すれば、「(兼)観光旅行」としての巡講の側面を確認することができるのである。

### 3.2. 『南船北馬集』にみる観光行動

『南船北馬集』は、国民道徳の向上、すなわち修身教会運動の一環としての講演旅行・第二期巡講（明治39年4月～大正8年6月）の旅行記である。「南船北馬」のごとく、多忙な旅行の連続だったが、大学経営からは解放され、気持ちの上では自由な旅行だった。行く先々で様々な人との交流を深め、保養を兼ねることもあった。「午後、二宮駅に至りて乗車し、西行の途に上る。車中、哲学館大学出身鈴木智弁氏に相会す。氏は京都東寺中学林に赴任すといふ」（12・194）。「香久山より畝傍に出でて乗車し、奈良駅にて上田晃覚氏と袂を分かち。氏は四月九日より四十日間随行せられたり」（12・215）。

巡講は歓迎された。「当地にては特に井上博士招聘会を設けられ、望外の優待歓迎を受く。晚餐には幹部の諸氏と杯膳をとみにす」（14・335）。「応接室に扇風機をかけ、便所に芳香を薫ずる等の用意」もあった（14・129）。マイクのない時代、幾千人の聴衆を前に声は枯れ、「演説を必ずその場内（雨中体操場）においてするも天井なくして音声を費やすこと多きが……いかんせん連日の講演に音声を濫費したりしたために声死して音発せざるに苦し」んだ（14・146）。風邪で声が出ないこともあった（15・224、参照）。演説中は、みな静かだったが、演説の前後一人の拍手するものなく、ときどき念仏の声を聞く（13・459、参照）こともあった。

「館主巡回日記」と比較し、旅行記の分量は圧倒的に多くなる。著述の時間も確保されたものと思う。内容もバラエティに富む。円了は様々な事物に関心を寄せ、それを記録する。そこには強い好奇心と「学び」の姿勢があった。むろん「漫遊」だから「遊び」もあり、「楽しみ」もある。こうした円了にとっての「観光」とは、第一に景勝地を訪ねること、すなわち景観の鑑賞にあった。各地の景観美が円了の心を捉えた。名所旧跡もこまめに回り、温泉地では入浴を楽しんだ。心身の疲労や病気を癒す旅行もあった。いずれの旅行でも円了は訪問地の人々との交流に努め、情報を収集した。比較・観察的な記述も旅行記の随所に見られる。

『南船北馬集』には、中国、台湾、韓国・朝鮮の旅行記（「満韓紀行」「台湾紀行」「朝鮮巡講日誌」）が含まれる。これらの巡講は3回に分けて行われた（明治39年10～11月、明治44年1～2月、大正7年5～7月）。多忙の中にあっても円了は風光を愛で、見学を行い、見聞を深めた。鉄道の発達と自動車の普及により効率的な移動が可能となった。円了は内地におけるよりも神社仏閣の参詣を積極的に行っている。交遊も盛んだった。哲学館・東洋大学・京北中学関係者、東本願寺関係者、当地の行政・教育関係者、講演聴衆者との交流、再会者との懐旧談など、円了の交遊の広さと深さが知られる。

台湾・台北では、忙しい日程の合間、台湾神社参拝、市街一覽、各学校を巡覧、また「昼夜とも揮毫に忙殺せられ」（「台湾紀行」17頁）、台南では「名所旧蹟多々あれども、時間の許さざる為に一々巡見する」（「台湾紀行」28頁）ことはかなわなかった<sup>14)</sup>。もっとも台湾神社では「社頭の風光頗る好し」（「台湾紀行」16頁）と思わず足を止めている。景観美を旅の楽しみとする円了にとって禿山同然の韓国の風景にはがっかりした。「韓国の山には樹なく草なく、赤土を露出す、実に殺風景を極む」（「満韓紀行」64～65頁）。満州（現中国東北部）では日露戦争の史跡たる203高地を見ようとしたが、雪のため果たせなかった。「203高地に登らんとせしも、積雪の為に果する得ず、山麓に至りて帰る」（「満韓紀行」75頁）。

「朝鮮巡講日誌」は3編だが、巡講自体は連続して行われている。自動車はかなり普及していた。

「午後六時自動車にて疾風の如く走り、七里の間を一時間にして忠清南道の首府公州に着す」（「朝鮮巡講第二回[南鮮及東鮮]日誌」117頁）。移動中の景観が疲れを癒した。「野花の媚を呈するを見る」（「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」92頁）。「台下に漢江を帯び、対岸に田野及び山岳を望む所、大に鬱懷を散じ、浩気を養」（「朝鮮巡講第一回[西鮮及中鮮]日誌」104頁）になった。「麦酒を傾けて渴を医す」（「朝鮮巡講第二回[南鮮及東鮮]日誌」127頁）こともあった。（南満州）鉄道経営のホテルがあったが、「西洋人に占有せらると聞き、金剛館に泊」（「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」97頁）った。「温泉浴室」もあり、「頗る安廉」だった。円了は金剛山を絶賛する。「金剛山第一の奇勝たる万物相の探勝に向ふ……耶馬溪などの遠く及ぶ所にあらず」（「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」97～98頁）。

### 3.3 全国巡回講演にみる交通利用

巡講の時代は、鉄道の整備もかなり進み、円了も鉄道を積極的に利用するようになった。実際、移動の中心は鉄道となった。当時あって、円了はおそらく最大の鉄道（鉄車、汽船）利用者だったろう。そもそも超人的ともいべき円了の巡講は鉄道の利用がなければおよそ不可能だった。円了畢竟の大事業を達成する上で鉄道の果たした役割は大きい。鉄道は円了の効率的な国内移動を可能にした最も重要な交通手段であった。

そのような鉄道も効率性を第一義とする円了にとっては単なる移動手段の一つにすぎず、旅行記に鉄道そのものを賞賛するような記述は見られない。逆にそれを否定する記述もない。ただ以下のように、鉄道の開通により（美しい）自然の景観（美）が損なわれることを、それがやむをえぬこととはいえ、残念に思っていた。「朝霧をおかして人吉を発す……軽艇に駕して球磨川を下る。舟行急速にして、兩岸の風光、応接にいとまあらず。なかんずく『槍たおし』の勝、清正公の岩の景、最も妙なり。その天工は筆紙のよく尽くすところにあらず。近来、この間鐵路を架す。風光のため一変せざるを得ず」（12・465）と記し、以下の漢詩を詠む。「球磨川上別風光、山紫水明無尽藏、誰毀奇巖開鐵路、炭煙恐是穢仙郷」（12・465）。

ともあれ、円了は鉄道の存在を自明のものとしていた。移動手段の一つにすぎない以上、鉄道に固執する理由はない。実際、円了は鉄道がなければ、汽船を利用したし、目的地に至れば、（鉄道、汽船の補完交通として）馬車（鉄道）、腕車（人力車）、小舟、さらには徒歩と、その時々交通事情により自在に移動手段を使い分けていた。

円了の移動方法はまず目的地にできるだけ速く（効率的に）到着する。その際、鉄道と汽船が拠点間直行の役割を果たした。鉄道には（自宅のある）東京（新橋・上野）を起点として乗車、目的地（拠点駅）へ直行、降車し、そこを起点に各地の講演会場（鉄道・汽船以外の）二次的交通機関（馬車、人力車、小舟、徒歩）を用いて回った。

自宅が東京にあるから、旅行の起点が東京であることはいうまでもないが、鉄道の利用は上野と新橋に分かれた。上野は東日本方面、新橋は西日本方面である。汽船利用の場合は、新橋から横浜まで鉄道を利用し、横浜港から船に乗った。また帰港後は反対のコースをとった。以下に円了の交通利用、とりわけ鉄道利用の一端をみていくこととする。

「明治34年6月23日、晴れ。朝、上野発車。夕、直江津より乗船、夜11時……糸魚川着」（12・137）。

「明治35年6月19日夕、新橋発車……6月20日、晴れ。午前11時、福井市着」(12・161)。

「明治37年1月15日。朝。東京出発。午後2時、甲府着」(12・169)。

「明治40年1月27日午後、東京出発。28日午前10時、大阪港川口にて商船会社汽船平壤丸に搭乗し、正午解纜。神戸を経て鹿児島へ直航。30日午後、寄港……31日正午、鹿児島出帆、沖縄に向かひて航行す。海上、風波高し。2月1日……午後、大島に寄港す。名瀬湾に繫留すること5時間にして出港す……2日……午前10時、沖縄県那覇港に入る」(12・274)。

「明治40年6月19日……早朝、田原を発し、泥路をわたり、車行六里……当地は駅館川を隔てて汽車の停車場あり。鹿児島以来三カ月を経てはじめて汽車の笛声を聞く」(12・358)。

特急・夜行列車の利用も見られた。

「明治35年3月26日……午後神戸に一休し、当夕夜行汽車にて翌朝帰館す」(12・153)。

「明治38年8月1日、即夜鉄車に駕し……山陽鉄車に投じて長州馬関に移る」(12・172)。

「明治39年11月28日、朝神戸に着し、即夜の急行にて帰京す」(「満韓紀行」77頁)。

交通手段を効率的に組み合わせて移動した。

「明治39年6月13日。朝、雨をおかして東京を発し、日光を経て足尾に向かふ……翌朝……緑陰を踏みて峻嶺を攀じ、溪行数里、鉄路に駕し、一走して足尾町に入る」(12・218)。

「明治39年7月8日、午後、新橋発車。9日午前、岡山着……汽船に駕して薄暮、高松市に着す」(12・221)。

「明治39年9月4日……汽車にて伊万里に至り、これより和船にて福島(長崎県)に至る」(12・241)。

「明治40年7月21日、東京を発し……海岸線により仙台、盛岡を経て、翌22日朝、青森に着し、これより汽船玄海丸にて函館に入る」(12・364)。

「明治40年8月6日、午前、鉄道馬車に駕して小沢に移る……小沢より汽車に投じて余市町に至る……余市停車場より……馬車に駕して即信寺に入る……8日……余市より漁船に乗じて美国町に向かふ……午後、古平に上陸し、宝海寺に一休の後、歩行して美国に至る」(12・369~370)。

「明治40年11月25日、晴れ。暁天雪を醸し、満城銀世界となる。午前、室蘭を発し、登別駅に降車し、これより馬車にて行くこと一里半、凍風肌を裂かんとす……26日、午前、登別を発し、室蘭に帰る……午後3時、上船す……汽船は陸奥丸なり。翌朝5時、青森着。6時、汽車に駕し、当夕、仙台にて随行青樹氏と相別れ、28日午前、東京に帰着す」(12・411~412)。

「明治41年10月23日……腕車を駆りて小倉市に移り……10月28日……汽車および腕車にて曾根村に移る」(12・536~537)。

旅行中、以下のような鉄道風景を目にした。

「明治41年5月15日……肥州一路鉄道通、出没麦烟桑霧中」(12・471)。

「明治41年10月19日……当日、陸軍輸送のために午前、乗車を謝絶せられ、午後、折尾(村)に移る」(12・535)。

「明治41年11月3日(天長節)、この日、下の関駅より閑院宮殿下の御乗車あらせられたるために、各駅に小學校生徒雨をおかして奉迎せるを見る。翌四日午後、東京に安着す」(12・540)。

汽車に乗り遅れたり、交通障害に遭ったこともある。

「明治41年2月9日、早朝、伊良原を発せしも、泥深く道険にして馬進まず。犀川停車場に着す

るや、汽車すでに通過せり。徒然として茅店に休憩すること二時間の久しきに及び、やうやく乗車するを得たり」(12・427)。

「明治41年3月2日……午前11時、新田氏とともに車を連ねて三保を発し、田畦をわたりて耶馬溪に出ず。駅道改修のために車を通ぜざる所十余町に及び、溪流に沿つて徐歩し、仰ぎて崖頭を望めば、羽化登仙の趣あり」(12・434)。

「明治41年4月13日……藤富を発し川尻駅に至れば、汽車煙を吐きて発す。空しく駅前にて三時間を費やし、午後二時乗車、下益城郡小川町(熊本県)に移る」(12・457)。

「明治41年7月16日……石油車に投じて寛林を一過し、唐津停車場に着するや、汽車すでに発せり。やむをえず送行の諸氏数名とともに茶亭に休憩し、ビールを傾けて次の発車を待つ。午後、相知駅に着す」(12・499)。

当時の道路事情は悪く、通行は時に思わぬ不便を強いられた。

「明治39年4月10日……松山を経て吉野郡内に入る。道険にして泥深し。人車進むを得ず、犬馬の力をかりてやうやく進行す。馬の先引きは、今回はじめてこれを見る」(12・195)。

「明治39年7月19日、綾歌郡山田村(香川県)本念寺において開会す……山路険悪、腕車転覆せんとすること数次に及ぶ」(12・224)。

「明治40年3月28日……早朝、飢肥(宮崎県)を発し、深く溪山の間に入り牛嶺の険路にかかる。古木深くとざし斧斤山に入らず、風光おのずから太古の趣あり」(12・313)。

円了旅行記は、当時の交通・鉄道利用の実態、交通事情を知る上で極めて重要で、また興味深い。旅行記はいわば一般ビジネス客として鉄道を利用した当時の(活動的)知識人の交通利用の実態を知る上で極めて貴重な史料・記録となっている。ちなみに、これまで交通及び鉄道史研究の多くは、行政側・事業者側からの研究が大勢を占めていた。その点、円了旅行記は、あくまでも一鉄道利用者としての記述に留まっている。この点、円了旅行記は需要者側からみた鉄道・交通利用の実態を把握する上で極めて大きな意味をもつものと考えられる。

## 4. 海外視察旅行にみる観光行動と交通利用

### 4.1 海外視察旅行にみる観光行動

円了は、当時としては、異例ともいべき生涯に3回の海外視察旅行を行ない、それぞれ3冊の旅行記を出版している(表3参照)。第1回、第2回は欧米中心だったが、第3回は南半球にまで足を延ばしている。旅行記には初めて目にする事物や光景に目を奪われる一旅行者としての姿が窺われる。当時の観光事情も垣間見られる。「チューリヒは目下観光の客、四方より雲集し、旅館ほとんど空室なし。晩に至り納涼の客湖畔を徘徊し、橋上の来往織るがごとし」(23・335~336)。

旅行は交遊の場でもある。円了はいずれの旅行でも、多くの人と交流を重ね、行く先々で知人との旧交を温めた。「市川(純一)氏にはさきにインド・ボンベイにおいてはじめて相知り、ここに九年を隔てて、さらに豪州において再会を得たるは奇遇といふべし」(23・270)。聖人ゆかりの地を訪ねるのも楽しみの一つだった。ルター、カント、ゲーテ、ミルトン、ニュートン、スペンサー

などの生地、墓所等をこまめに回っている。海外旅行では“何でも見てやろう”という姿勢が随所にみられる。

#### 4.1.1 『欧米各国政教日記』

『欧米各国政教日記』（上編：明治22年8月、哲学書院）（下編：明治22年12月、哲学書院）は、円了の第1回目の海外視察旅行（明治21年6月9日～明治22年6月28日）の旅行記であるが、本書は、日付、行程等の記載がなく、いわば西欧事情視察の報告書となっている。「余、はじめ紀行、日記等は編述せざる意なりしが……懷中日記中より日月地名を除き去り、もっぱら宗教、風俗に関したる種目のみを取り出だし、一編の冊子となせり。仮に題して『政教日記』といふ」（23・19）。題名の通り、もっぱら宗教と風俗に関する事項を記したものが<sup>15)</sup>、「この書、むしろ洋行雑記にして、宗教、風俗のほか種々雑多の事項を混入せざるにあらず」（23・19）と断っている通り、様々な事物・事柄の観察・見聞の記録でもあり、円了の好奇心の旺盛さが知られる。「船インドに着し、その市街、民家、林園等を観察するときは、おのずからわが日本の実況を提出するに至る。これ、その風俗、風景の、両国の間はなほだ相似たるところあるによる」（23・131）。「西洋に行くものはホンコンの意外に美なるに驚き、西洋より帰るものはホンコンの意外に美ならざるに驚く。これ、ホンコンそのものの前後異なるにあらず、これを見る人の目、前後同じからざるによる」（23・132～133）。

調査報告書ともいふべき本旅行記に観光的要素を見出すことは難しいが、帰国時、馬関（下関）の風景に目をやる円了の姿に観光旅行者としての一面を窺うことができる。「船、玄海を渡りて馬関に近づくに及び……その風景の画図中の山水に類するがごときものを見る……実に日本は天地の公園なり、自然の画図なり。この画図ありこの公園ありて、はじめて外人の来遊を引くべし。いながら富国の方法を講ずべし」（23・133）。

#### 4.1.2 『西航日録』

2回目の海外視察（明治35年11月15日～明治36年7月27日）旅行記の『西航日録』（明治37年1月、鶏声堂）は、「余が欧米漫遊の途中、目に触れ心に感じたることをそのまま記して、哲学館出身者および生徒諸子に報道したるもの」（23・157）だが、旅行記としての面白さをいうなら本書は十分にその魅力を備えた紀行文となっている<sup>16)</sup>。「明治三十五年十一月十五日、余再び航西の途に上らんとし、午前八時半、新橋を發す。ときに千百の知友、学生の余が行を送るありて、汽笛の聲は万歳の聲にうずめられ、秋雨蕭々のうちに横浜に着」（23・159）し、神戸に寄港する。インド・カルカッタでは、まず「哲学館出身者大宮孝潤氏をその寓居にたずね、当夕ここに一泊」（23・168）、奇遇にも河口慧海と再会した。「同氏の宅において、河口慧海氏に会するを得たるは、奇縁といはざるべからず」（23・168）。3人揃って記念写真も撮った。しかも、その後、バンキポール（駅）では、「実に奇遇」にも「藤井宣正氏に（も）面会」（23・176）したのであった。

地中海を経て、ロンドンに到着したところで、「哲学館事件」の報告を受けた。「去月三十日、東京より飛報あり。曰く、十二月十三日、官報をもつて文部省より、本館倫理科講師所用の教科書に関し、教授上不注意のかどありとて、教員認可取り消しの厳命あり云云」（23・188）。この報に接し、円了は、「苦にするな荒しの後の日和あり……伐ればなほ太く生ひ立つ桐林」（23・188～189）の句を詠み置き、旅行を続けた。旅行中、遭遇した「哲学館事件」は、円了にとっては、むしろこれを外から客観的に観る機会ともなった。

「哲学館事件」の懊悩を抱えながらも8ヶ月余にわたる世界視察を終えて帰国した円了は、視察中に構想していた哲学館の大学認可、修身教会運動を展開していく。さらに大学開設記念として購入した土地に「四聖堂」（「哲学堂」公園）を建設することも明らかにした<sup>17)</sup>。『西航日録』にみる「触れ合い」「学び」「遊ぶ」海外視察旅行は、円了にとっては、その後の飛躍に備える契機ともなっていた。

#### 4.1.3 『南半球五万哩』

三回目の海外視察旅行（明治44年4月1日～明治45年1月22日）は、1日平均169マイルという「電光的旅行」（23・241）だったため、その旅行記である『南半球五万哩』（明治45年3月、丙午出版社）は、「精細の観察は到底望むべからず、ただ瞬息の間に余の眼窓に映じたる千態万状を日記体書きつづりたるもの」（23・241）となった。のびやかな筆致は大学経営から解放された円了の自由な境地を反映している。今回の旅行は南半球の国々（オーストラリア、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、メキシコ）の視察に重点が置かれていたが、欧州の国々、特にイギリス、ドイツ、フランスは3回目の訪問となった上、北欧（ノルウェー、スウェーデン、デンマーク）にまで足を伸ばし、極めてグローバルな視察旅行となった。赤道も4回通過した。

明治44年4月1日、横浜を出港、香港、広東、マニラを経て、赤道に近づく。赤道通過は、最大の関心事だったろう。「朝六時に日昇りて、夕六時に没し、没後ただちに暗黒となる。まことに昼夜平分なり。これ、赤道の近きを知るに足る」（23・256）。「当夕九時、まさしく赤道を経過す。ときに汽笛一声を放ちてこれを報ず。これより船員の妖怪行列ありて、一大喝采を博せり。海上は無月暗黒、ただ中天に点々、四、五の星宿を認むるのみ」（23・257）。赤道を横切り、オーストラリアに向かい、メルボルンでは、「海岸の風景を一望せんと欲し、車行してブライトンビーチおよびサンドリングラムに至る。時すでに冬季にせまり、寒潮岸を洗ひ、浴客あとを絶ち、埠頭寂寥たり。茶亭に一休し、温湯に一浴して帰」（23・275）った。

喜望峰を回り、再び赤道を横断、英国に入る。ロンドンでは「客中にはかに思ひ立ち、北極海観光の一行に加はり、欧州最北地点なるノルウェー・ノールカップにおける夜半の太陽を望見せんことを期し……グリムズビー港に至りて乗船す」（23・314）。そして日本人としてはおそらく初めて白夜を体験する。「当夜は十二時に至るも太陽地下に入らず、まさしく北天にかかり、徐々として東方に移る。一天片雲なきも、また星光を認めず、全く白昼なり……船客、多く徹夜して太陽を望む。なんとなく奇異の感に打たる。夜半十二時砲火を發し、かつ汽笛を鳴らす。これ、初めて夜半の太陽を見たるを報じ、かつ祝するの意なり」（23・321）。「北極海観光」への参加は観光旅行者としての円了の面目躍如たるものがある。

以上のように、「旅行中の円了の態度は、あくまでも自分の好奇心のありかに忠実で、機会を逃さず珍しい場所に足をのぼし、素直に感動する、だが決して物に執せず、自然にまかせる風が目立つ。ゆく先々で、日本人の代表者とはまめに会い、世話になり、話を楽しみ、無理な孤独感にひたったりはしないのである。あくまでも、たまたまの旅行者、漫遊者という形にはまっぴの行動がほほえましく、日記の記述もさらりとして飾るところがな」かった<sup>18)</sup>。

#### 4.2 海外視察旅行にみる交通利用

海外渡航・視察の手段は汽船であるが、内陸部の移動には全て鉄道を利用した。日本では自明の

ものとしてほとんど関心を示さなかった鉄道についても海外では日本との相違・比較から関心をもって記している（明治44年5月1日、ブリスベーンでの日記、参照）。以下、『西航日録』と『南半球五万哩』に観光行動に伴う交通・鉄道利用の実際を見ていく。

「明治35年12月24日、午後2時、バンキポール停車場に着す……これより当夜7時発の汽車に乗り込み、11時ガヤに着し、ダクバンガロー (Dakbungalow) に入る……25日、晩に至りてガヤに帰り、即夜の汽車にてバンキポールに着し、さらに乗車して26日午前8時、ベナレスに着す」(23・176)。

「明治36年1月17日、午前10時、フランス・マルセイユに着港し、ここに滞泊す」(23・183)。

「1月24日、午後1時、テムズ河口に入る。3時ドックに着し、税関の検閲あり。ただちに汽車に転乗し、夜に入りてロンドン市に着す」(23・186)。

「3月28日、朝ベルファストを去り、車行およそ百マイルにして首府ダブリンに着す (23・198) ……ダブリン (Dublin) はアイルランド第一の都会なれば……市街縦横に電車を通し、電線あたかも蛛網のごとし。しかしてその線下に来往する人は、蟻のごとく見ゆるなり」(23・199)。

「4月24日、早朝ヘースティングズを發し、ドーバー (Dover) 港より上船……4時間にしてベルギー国オステンデ (Ostend) 港に着す。これより最急行にて、当日午後6時、ブリュッセル市に着す」(23・208)。

「4月27日。昼食後、汽車に駕してウォータールー古戦場を訪ふ。停車場内に宿引あり、強売あり」(23・209)。

「4月30日、夜行汽車にてブリュッセルを發し、翌5月1日朝、ドイツ・ベルリンに着す」(23・211)。

「5月3日、ライプチヒに至り、塚原、熊谷、藤岡三氏に面会し、清談数時にしてベルリンに帰る」(23・211)。

「5月7日、早朝ベルリンを發し、午後7時、ドイツ北部の一大都会たるケーニヒスベルクに着し、ここに一泊す。当地はカント先生の郷里なり。カント先生の銅像に参詣し(23・213)……同日(5月7日)、午後7時ケーニヒスベルク發車、夜中11時、独露国境に着す。税関ありて、いちいち厳重に旅行券を調査す。わが国徳川時代の関門を通過するがごとき感あり。停車場内に入れば、正面にヤソの画像を安置し、その前に灯明を掲げ、ロシアの特色を示せり……これよりロシアの汽車に乗り換へ、夜1時發車。汽車はこれを他邦のものに比するに一層大にして、意外に安逸なるを覚ゆ。しかして、その走ることはなほだ緩慢なり。ゆえに余、一句をよみて、汽車までが大国気取る露士亜かな……翌9日、早朝より車外を望むに、四面一体に荒漠無限の平原にして、森林数里にわたり、その間往々麦田を挟むを見る……午後7時、ロシア・サンクト・ペテルブルグに着す。ベルリンよりこの地に至る駅路およそ千百マイルありて、車行36時間を要す。インド以来の長途なり」(23・214～215)。

「5月12日、当夜10時発の急行にて露都を辞す……14日、朝6時ベルリン着……15日暁天ベルリンを辞し、スイスに向かひて發す。午後5時フランクフルトに降車して、文豪ゲーテ、シラー両翁の遺跡を訪ひ、つひにここに一泊す……翌16日、早朝フランクフルトを發してスイスに入る……午後5時、スイスのバーゼル市に着し、ここに滞泊。5月18日、スイスの勝を探りてチューリヒに至る。当所に湖水あり。大小の群山これを圍繞し、その風色、実に心目を一洗するに足る」(23・218)



～219)。

「5月19日、朝スイスのバーゼルを發し、フランス・パリに向かふ……午後5時、パリに着す」(23・221)。

「5月24日、午前11時(パリ)發車、ドーバー海峡を渡り、午後7時、ロンドン着。即時にスコットランド行きの汽車に乗り換へ、夜中進行。翌朝5時、エジンバラ市に着す。ここにとどまること2時間、スコット翁の記念碑および公園を一覽し、さらに乗車。午12時アバディーン(Aberdeen)に着す。北部の大都会なり」(23・223)。

「5月26日、朝アバディーンを發し、海岸にそひて北走し、午12時インバネスに着す。これ、スコットランド高地の都府なり……夜10時までは灯光を要せず、10時後といへども月夜のごとし」(23・224)。

「5月29日、これよりカーライル(Carlisle)町に移る……さらに夜行汽車に転乗し、英国唯一の温泉場たるバース(Bath)に向かふ。20日、朝7時バースに着す」(23・225)。

「6月2日、再びロンドンに帰る」(23・226)。

「6月12日、朝10時半ロンドン・ユーストン停車場を發し、2時半リバプール町に着す。市中を見物すること1時間半にして、ホワイトスター航路の汽船セルチック号に乗り込む……13日、朝アイルランド・クィーンズタウン(Queenstown)に着し、正午この港を發して以来、米国ニューヨークに達するまで海路三千マイルの距離を七昼夜にて渡航し、20日ニューヨーク港内に入り、午後5時上陸す」(23・227)。

「6月24日はハーバード大学学位授与式の挙あるを聞き、前夕の汽車にて同所に至り、場内に列席す」(23・228)。

「6月28日、午後8時ニューヨーク發車、翌日バッファローに降車す」(23・230)。

「7月5日、夕8時シアトル港に着す……米国の名物は鉄道にして、その長さ185,000マイルにわたり、ほとんど自余の世界中の鉄道を合計せるものに同じ。しかして、車室の美麗なると停車場の粗雑なるとは、またその地の名物なり。車中に食堂、寢室はもちろん、談話室、遊覽室、読書室、沐浴場、斬髪所等あるは、ほかに見ざるところなり。また、物価の高値なるも同所の名物にして、一回の斬髪料、上等4円以上なるあり、車中の寢室一夜12円なるあり、ほかは推して知るべし」(23・231～233)。

以上は、『西航日録』、『南半球五万哩』では、以下のような行程となる。

「明治44年4月1日……午前8時……新橋を發車し、10時、郵船会社日光丸に入乗し、正午、横浜を出港す……2日……午後1時、神戸に入港す……4日……午後4時抜錨す……門司に向かふ。5日……午前11時、門司に入港す。午後、上陸して散歩を試む。1,260トンの石炭を8時間にて積了せり。その迅速なること、外人の目を驚かす……6日……午後4時、長崎に入港す」(23・244)。

「4月26日……晴れ。朝8時、郵船会社八幡丸に相会し、互いに汽笛を吹き、応接して過ぐ」(23・262)。

「5月1日……早朝汽車に駕して、ブリズベーン市に至る。途上田野を一望するに、概して赤土荒原にして、殺風景を極むるが、すべて牛馬の牧場なり……午前11時、汽車にて帰船す。(往復18

マイルの) 汽車賃、9ペンスすなはちわが36銭。汽車に一等、二等ありて三等なきは、豪州の特色なり。車室は粗悪にして、その二等はわが三等よりもあしし……犬の背上に錢函を結び付けて無言の動物をして人に代はりて恵金を請はしむるもあり」(23・265)。

「6月11日、(南アフリカ) 4時、ダーバン港に着す(23・291) ……電車は二階付きにして、ホバート式なり。乗車賃、1マイル8銭、20マイル16銭とす」(23・293)。

「7月8日……臨時汽車にてロンドンに向かふ……昨今ロンドンの気候は、あるひは暑く、あるひは冷ややかに、朝夕は秋のごとし、日中は夏のごとし」(23・308)。

「7月18日……早朝キングズ・クロス駅を発し、リンカーンシャー州グランサム駅に降り、さらに馬車を駆りてここ(ニュートン誕生地コルスターワース村)に至る……ロンドンより往復汽車211マイル、馬車12マイルあり」(23・309~311)。

「7月20日、余、ロンドンに遊ぶこと前後三回なり……その前後を比較するに、多大の相違あり。第一はロンドンが市外に向かひて膨張し、各方面に人の輻湊する場所を生ぜること、第二は地下鉄道の電気に変じたること、第三は市街の乗合馬車が多く自動車となりたること……第十は婦人にして喫煙し、またはパブリックバーに入りて飲酒するものあること等なり。概して言えば保守的の英国にして、欧州大陸風に漸化せる傾向あるを見る。あるひはまた、米国風に感染せるところあるがごとし。しかれども、ロンドンの日就月將の繁栄は、ただ驚くよりほかなし」(23・311~312)。

「8月3日、午前8時ベルゲンを発して、首府クリスチャニアに向かふ……汽車やうやく溪流にそひて山間に入る」(23・329)。

「8月4日、午後6時発車夜行にて、スウェーデンに向かふ……この間平原麦田のみ。江流にそひて進行し、国境に至りて停車し、税関の検閲あれども厳ならず。終宵車中に臥す」(23・330)。

「8月5日、午前7時半、スウェーデン首府ストックホルムに着す」(23・330)。

「8月6日、午前10時半発にてデンマークに向かふ……車窓より村落の農家を望むに、屋根は赤瓦またはブリキを赤く塗りたるを用ひ、木壁もまた赤く塗り、緑樹の間に紅を点ずるの観あり。しかして風景の賞すべきものあらず。9時半マルメ駅に着す。これより渡船に駕して海峡を渡る……11時半、コペンハーゲン市に着船す」(23・331~332)。

## 5. 旅行記に見る円了の関心事

旅は好奇心を刺激する。普段見慣れたものでもどことなく目新しく感じられる。円了は好奇心旺盛な人だった。本節は、旅行中、円了が関心をもった事物・事柄を旅行記の中に見ていく。取り上げる事項は、①交通、②月、③酒、④「不潔」と「怠惰」、⑤犬・鶏・蛙・蟬の声と蚊、⑥温泉保養と健康、である。これらはいずれも、学生時代から晩年に至るまで、生涯を通じて、旅行中、円了が関心をもった事物・事柄である<sup>19)</sup>。

### 5.1 交通

巡講・旅程の効率的な移動のため円了は常に交通手段に気を払っていた。とはいえ、それはあくまでも移動の効率性、利便性、交通の機能性に着目しただけであって、交通機関そのものに対する

強い関心があったわけではない。以下の記述は、たまたま交通事情に好奇心をそそられて記したまでのことである。

「本県（＝岩手県）は交通不便のために種々の乗り物ありて、毎日乗り物を異にするは、他県の旅行の単調なるに比し、かえつて多趣味なるを覚ゆ。これを表示すること左のごとし。一、人力車 二、勅任馬車（久慈町にて用ふ） 三、円太郎馬車 四、荷車馬車 五、和船（津軽石にて用ふ） 六、海汽船 七、川汽船（黄海にて用ふ） 八、石油発動機船（宮古と小本間に用ふ） 九、汽車 十、軽便鉄道 十一、電気鉄道（花巻と志戸平の間にあり） 十二、馬車鉄道（水沢と岩谷堂の間に用ふ） 十三、轎（仙人嶺にて用ふ） 十四、荷鞍つき馬 十五、西洋式鞍馬 十六、自動車 以上十六種あるうち、電鉄を除く外はみなこれを用ひたり。これまた本県の名物の一に加ふべし」（15・203～204）。

また、能州巡回中の七不思議の一つとして以下のようなことを記している。「灘の人車鉄道（注：灘村にては石材運搬のため数里の間レールの布設あり。このレールに轎を載せ後ろよりこれを押す、運転すこぶる軽し。これすなはち一種の人車鉄道なり）」（12・108）。

円了は交通、とりわけ鉄道についてどのような認識をもっていただろうか。産業経済の発展、地域振興に鉄道が果たした役割あるいはまた鉄道の光景や印象について以下のような記述がある。

「明治40年10月14日……厳霜薄氷を見る……当地は汽車全通以来にはかに繁栄をきたし、その勢ひ根室を圧倒す。一方に釧路川あり、一方に海湾あり……明治41年5月6日……八代より汽車に駕す。乗客充溢し、車窓より出入するものあり。その雑踏いふべからず。熊本市招魂祭を拝観せんと欲してなり。松橋駅より馬車に転乗して宇土郡松合村（熊本県）に移る……車窓回望動吟魂」（車窓より四方を見渡せば詩情起こる）」（12・466）。

「明治40年10月19日……十勝国帯広町より……空知郡落合駅に至る。鉄車、蛇行して上る。車窓一望、平原百里の遠きに及ぶ」（12・398）。

「明治40年10月24日……天塩国上川郡名寄駅に移りて開会す……当地は新開地なるも、鉄道の終点にして、北見地より往復上下するもの、みなここに宿泊せるをもつて、近年にはかに発展せり……28日、寒風をおかして砂川駅に移る」（12・399～401）。

「明治41年4月25日……汽笛無端堤上起、鉄車載炭入仙関……この沿岸一帯鉄路を架設し、いまだ開通せざりしも、炭車のすでに往復するあり」（12・461）。

大正5年12月、京都府に旅した折、丹波名産の栗の木が鉄道の枕木のために伐採され、代わって桑の木が植えられていることに寂しい想いを抱いた。「聞くところによれば、一時は栗木をきりて鉄道の枕木に用ひ、その代はりに桑園を設くるに至り、大いに栗の産額を減ぜりといふ。よつて一詠す。丹山深处有農村、戸々終年蚕事繁、名物亦難免時変、栗林今日化桑園」（15・81）。円了は、産業発展のためには鉄道の開通もやむをえないものとみていたようだ。

車中での時間は、円了は、これを執筆、読書、調べ物、講演準備などに充てていたものと思われるが、時折、窓外に目をやることもあった。そこには詩人としての円了がいた。

「明治39年9月26日、秋晴今日気如春、駅路迢々向口津、車上看来農事急」（12・250）。

「明治40年11月10日、汽車にて空知郡岩見沢町に移る……車窓よりこれを望むに、柳葉なほ青き中に、落葉松の一面黄にして紅色を帯ぶるを見る」(12・405)。

## 5.2 月

円了は観月を趣味とした。旅先でも折に触れて月の様相・形状を記している。「夜に入れば新月天に懸かる。その形、鎌のごとし」(23・288)。『漫遊記』にも以下のような記述があった。「親友四五名ヲ会シテ清宴ヲ開ク時月夜ニ当リ千里雲ナフシテ長空洗フカ如シ明月林端ニ懸テ樹影蒼然タリ」(「寓居記事」106頁)。「毎夜書窓ノ月ヲ玩フ幽趣限リナシ」(「冬夏遊跡」122頁)。上州(群馬県)を旅した折も「桃野村字月夜野に入る。地名すこぶる雅なり」(15・220)と感じ入った。

台湾では「たまたま満月に会す、春天洗ふが如く一点の雲影を見ず、異郷にありて中秋の月を望む心地し、壯絶又快絶なり」(「台湾紀行」34頁)と、外地での観月に満足している。韓国で観た月は趣を異にした。「山白く月も亦白く、別天地の観あり」(「満韓紀行」76頁)。「時に陰曆十三夜にして、夜に入りて月色愈々明かなり、先きに台州にありて中秋の明月を賞し、今韓国に入りて後の明月を望むも、また因縁と謂ふべし」(「満韓紀行」65～66頁)。

三度目の海外旅行では欧州から南米へ向かった。赤道を越えて南半球に入ると「日月を北天に仰ぐ」(23・357)ようになった。「夜に入れば天涯一片の雲なく、ただ半輪の孤月の高く北天に懸かるを望むのみ。満懐雄壯を覚え、快極まりなし」(23・289)。「夜に入りて天やうやくはれ、一輪の秋月北天に懸かる。詩思おのずから動」(23・275)き、漢詩を詠んだ。ブエノスアイレスで見た月にはいたく感動した。「夜に入りて天気ことに晴朗、一輪の明月北天に懸かり、清輝客庭に満つ。このときまさしく旧八月十五夜に当たり、南(半)球の春天に三五の明月を仰ぐは、生来未曾有の奇観にして、また一大快事なり」(23・376～377)。

ペルーからメキシコに向かうが、「いまだ赤道をこえざるも、日はすでに南天に入る。しかして月(は)なほ北天に」(23・413)あった。「午後六時十分に、太陽は地平線下に入りてその形を失ふ。ときに、明月さらに東空に懸かる。当夜は満月なり。六時三十分、全く残光を失ふ。赤道直下なるによる。八時後、雲ことごとく消して、ただ一輪の明月を仰ぐのみ。船客中ドイツ人ウルリヒ氏とともに船橋上に踞し、観月の宴をなして深更に及ぶ。清風おもむろに來たりて、爽快極まりなし」(23・414)。

留意すべきは南半球で見た月の形である。「当夜深更に至り、半輪の月を望むに、わが日本にて望むとはその形を異にし、月球の左半面にあらずして、下半面に光を生ぜるを見る」(23・357～358)。「月を北天に望み、半輪を下辺に生ずるは、やや奇異の感なきあたはず」(23・374)。

月食の記録もあった。「たまたま月食皆既に会す。一天雲なく、午後八時、球面全く黒し。少時のち明月に復し、清輝天地に満つ」(13・477)。「当夕、旧曆七月十五日に当たり、明月輝を放つ……九時より月食始まり、十時後は八、九分どほり光を失ふ」(14・166)。日食もあったが寝過ぎて観られなかった。「今朝日蝕皆既なるも臥床中にて見るを得ず」(「朝鮮巡講第一回[西鮮及中鮮]日誌」113頁)。円了ほど月に関心をもった旅行者はいない。月は円了のもう一つの趣味、漢詩の重要なモチーフとなっていた。

### 5.3 酒

円了は、一時、禁酒に努めたこともあったが、生来酒を好んだ(14・178、参照)。学生時代は放歌高吟、学友たちと大いに飲んだ。「各々郷歌ヲ発ス献酬数行杯盤狼藉酒尽キ殻空フシテ皆散ス」(「寓居記事106頁」)。旅の疲れも酒で癒した。「浴終リテ楼ニ倚リ杯ヲ呼テ声ヲ放ツ数日ノ苦熱一散シテ満懐洗フカ如シ」(「筑波紀行」118頁)。

『漫遊記』には他にも以下のような酒に関する記述が見られた。「一酌一吟夜ノ闌ナルヲ知ラス」(「江島紀行」98頁)。「晩ニ楼ニ登リ杯ヲ呼テ酌ヲ命ス時中元ニ当リ……余輩酔后又歩ヲ散シテ通衢衢ヲ徘徊シ玉川ノ上ニ至ル」(「寓居記事」107頁)。「県別所兩人来訪ス酒ヲ命シテ夜ニ入ル黄昏舎ニ帰ル親睦会ヲ開ク杯盤献酬夜半ニ達ス」(「房総漫遊」115頁)。

巡講は酒を飲む機会が多い。「茶店にて麦酒一瓶を傾け、勇気を養」(「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」98頁)い、汽車に乗り遅れ、送迎者たちとビールを飲んだこともある。「唐津停車場に着するや、汽車すでに発せり、やむをえず送行の諸氏数名とともに茶亭に休憩し、ビールを傾けて次の発車を待」(12・499)った。

ペルーではピスコ酒を飲んだ。「ときに、ペルー名物のピスコ酒およびパルタ果を供せらる。ピスコ酒は砂糖にて製したる焼酎なり」(23・408)。

そのような円了の酒に対する考えはどうであったろう。「余は、酒を愛すといへども、その意気に至りては遠く及ばず、ときに余は、自己の飲酒主義につきて俗謡を作る。酒は飲むべし、遠慮はするな、但し正気を失ふな」(14・330)。「(わが酒は)朝はいや、昼は少々、晩たつぷり、とはいふものの上戸ではなし」(13・68)とのことだった。とはいえ、昼にも酒を飲むことがあった。「此日昼食は弁当を持参し、歙谷の旅店にて之を開く、麦酒も日本酒もなければ、朝鮮の濁醪を用ふ、少しく酸味を帯びて葡萄酒に似たり」(「朝鮮巡講第三回[北鮮]日誌」100頁)。旅行記にみる交遊の多くは酒を介して行なわれている。

### 5.4 「不潔」と「怠惰」

円了は「不潔」を嫌うとともに「怠惰」を軽蔑した。銚子に行ったときのこと―。「夜ニ入りテ寝ニ就ク寝衿破レテ且ツ垢アリ眠ニ就クニ苦シム」(「房総漫遊」114頁)。伊豆大島では「牛糞の臭気」(13・114)が鼻をつき、秋田では「馬尻の臭気」(14・355)に閉口した<sup>20)</sup>。(琵琶)湖北では、便所、入浴施設が不衛生、不潔なのに困惑した。「一言しておきたきは湖北(滋賀県長浜町)の風呂桶なり……その内部の暗黒にして空気の流通の悪しきのみならず、外部にて身体を洗ふこと難し。かつ湯の量極めて少なきをもつて、両三人入浴の後には、湯中に垢をとどめ、湯臭を発するを免れず。したがってトラホームや伝染病の媒介をなすの恐れあり……この特有の風呂だけは全廃せられんことを望む」(14・170~171)。

「不潔」は海外でも目についた。

インド・カルカッタの「土人街は不潔を極め、ここに入れば臭気鼻を奪い去らんとし、潔癖ある日本男子のよく忍ぶところにあらず」(23・169)。「チリの特色として忘るべかざる一事は、紙幣の垢に染みて黒色を帯び、その紙面には幾千万の黴菌を有するものあり。ひとたびこれを手にすれば、消毒を要するとの評」(23・403)に唾然とした。ペルーのリマ市でも「夜中は男女ともに路傍に立ち小便をなすために、往々臭気のはなはだしきを感じず」(23・408)るありさまだった。

一方、「チベット人は胎内を出でてより死するまで沐浴することなく、身体に垢の多きは多福の相なりといふ。これに加ふるにチベット人は顔面にバターを塗る習慣あれば、垢とバターとが混和して、黒光を反射するに至るといふ……不潔の点につきては、余もやや辟易せり」(23・171)。

ちなみに、中国・上海については次のような感想を記している。「城外の市街はその広大なる、神戸、横浜の比にあらず。東洋のニューヨークと称するも可ならん。されど城内の不潔にいたりては、実に言語道断なり。余、先年ここに遊び、彼我両国を比較して、『シナ人の心は黄河とともに濁り、日本人の心は富峰とともにきよし』といひたるが、十五年前と今日とさらに異なるところなし。しかるにその国を大清国と称するは、名実不相応といはざるべからず。自今、よろしく日本を大清国と名づけ、シナを大濁国と呼ぶべし」(23・160)。蓋し至言なり。北極海観光ではラップランド原住民の(不潔な)生活を垣間見る。「衣類は獣皮にて作るも、決して洗濯することなく、ときどき日光にさらすのみなれば、垢のために黒く染まり、臭気はなはだし。赤子はこれを獣皮にて包む。その形、エジプトのミイラに似たり」(23・322)。

貧は悪ではない。しかし貧であってもその身を清潔に保つことはできるとの思いから円了は「不潔」を嫌ったと思われる。もっとも「不潔」を嫌う理由は単に生理的なものかもしれない。そもそも「不潔」をあえて好む人はいないからこれを詮索すること自体あまり意味のあることではないようにも思われる。とはいえ留意すべき事項ではある。少なくとも「不潔」は円了の観察眼に触れた関心事であった。

円了は、生来「怠惰」を嫌い、勤勉を好んだ。刻苦勉励を旨とする信条から怠惰な人間や習俗を嫌った。「此辺(下妻)一帯林叢多ク水田甚タ少シ民間貧家ノ多キハ一ハ地味ノ肥膏ナラザルヲ以テナリト云フ然レトモ人民遊惰ノ風アリテ酒色ニ耽ケリ遠憂ヲ慮ルノ意ナシ而シテ目前ノ利ヲ争ヒ一時ノ快ヲ取ル是レ蓋シ貧困ノ多キ真因ナランカ挙動ノ粗暴ニシテ人気ノ平穩ナラザル亦之レニ本ツク」(「筑波紀行」118頁)。「沖縄県は一言をもつていへば、蓬萊仙境なり……ただ、その人民の迷信に陥り、遊惰に傾き、気概に乏しく、文明の空気に触れざるもの多きは、玉にきずあるがごとし」(12・286)と嘆き、「その氣質を改変するには、学校教育はもちろん、学校卒業後にもときどき訓誡を与へ、忍耐、奮励、勤儉、貯蓄の氣風を起こさしめざるべからず」(12・286)と助言している<sup>21)</sup>。

円了には「辛抱の棒で怠惰の鬼を打て」といった信条があった。「怠惰」は奮闘努力で克服すべきもの、また克服できるもの—。そう考える円了にとって、「怠惰」に甘んじる氣風や習俗はこれを許せなかったに違いない。

「怠惰」は「不潔」あるいは「貧」と異なり、円了の思想形成に関係する(と思われる)。すでに明確な評価基準をもち合わせていた円了にとって自らの価値観と相容れない事象・世界の拒絶は、仏教的立場から国粹主義を唱え、キリスト教を排撃したことにもつながった(と考えられる)。豊富な国内外の旅行体験を通じて広く世界に学ぶことも多かったが、むしろ旅行による内外の見聞は自らの思想及び日本の優位性を再認識・再確認する機会ともなっていたのではないかと考える。

## 5.5 犬・鶏・蛙・蟬の声と蚊

蟬の声、蛙の声は、季節の到来を告げ、趣(詩情・旅情)を誘う。「蛙声趣誘ふ」(14・137)。それはまた漢詩のモチーフとなる。「樹蜜蟬声静」(「西京紀行」93頁)、「蟬声静処讀書声」(「寓居記事」106頁)、「蟬声月色夏方深」(「箱根客寓」111頁)。南九州・宮崎では4月に春ゼミの声を聞いた。「途中、

すでに鳴蟬を聞く」(12・321)。鶏と犬のなき声も漢詩に登場する。もつとも、それは、声を聴くのみで、犬、鶏そのものの記述はない。「鶏犬声中日将午」(「日光并奥州紀行」102頁)。「犬ノ月ニ号ヒ草蛩ノ露ニ泣クアリ」(「寓居記事」106頁)。「鶏犬無声昼寂然」(「北越遊行」116頁)。「鶏犬声中日当軒」(「北越遊行」116頁)。「一路鶏声午下風」(「銚子紀行」105頁)。「犬声喚起清風夢」(「箱根客寓」110頁)。

『漫遊記』に見られた鶏・犬の声の記述は、『館主巡回日記』『南船北馬集』では、蛙の声・蚊音に替わる。朝鮮では、「当夕、はじめて蛙の声を聞き、漢詩を詠んだ。「蛙声客窓に入る、因て一吟す……電燈光底弄鳴蛙」(「朝鮮巡講第一回〔西鮮及中鮮〕日誌」115頁)。朝鮮の蛙声は「内地の如く高からず、却て眠を催進にする宜し」(「朝鮮巡講第一回〔西鮮及中鮮〕日誌」115頁)だった。「此地方は四面水田のみなれば、蛙声雨の為に喧し」(「朝鮮巡講第二回〔南鮮及東鮮〕日誌」122頁)。蛙声が読経に聞こえたこともあった。「蛙誦経」(15・136)。しかし、時に、その声をやかましく思うこともあった。「水田多し。夜に入りて蛙鼓枕頭にやかまし」(13・494)。台湾では二月中旬だというのに蛙の声を耳にした。「二月中旬月下蛙声を聞くも、亦別天地の趣あり」(「台湾紀行」34頁)。ヤモリの声も聴いた。「壁虎多く、夜中壁上に鳴く、其声秋蛩を聞くに似たり、是れ一奇なり」(「台湾紀行」26頁)。

蚊については神経質にこれを嫌った。「今夕はじめて蚊帳を用ふ」(14・328)「夜に入りて蚊影を見る」(14・66)。「この夜、蚊声を聞く」(14・294)。「夜中、蚊雷を聞く」(13・495)。そして「蚊の襲来」(12・262)を受けた。「十月なほ蚊の人を襲ふあり」(23・262)。「この地(北蚊野)は名のごとく夏時に蚊ことに多しといふ」(14・57)。「高松は蚊の名所なりとて、昼夜ともに蚊に攻め」(12・222)られ、福岡県木佐木村(現大木町)では、「昼夜ともに蚊軍(の)来襲」(12・514)に悩まされた。円了にとって「夜、蚊帳を用ひ」(13・538)ないのが、「避暑の良地」だった。山口・萩では蚊の原因がみかん畑(柑林)にあると聞いた(13・534、参照)。滋賀県長浜町(現長浜市)では、「夜分の蚊は案外少なく、ただ朝夕の藪蚊に苦しめ」(14・170)られた。秩父の三峰山は、「夏中ハ蚊ヲ見ズ」(「秩父遊行」127頁)だった。

南半球では、「メルボルンの蠅、ブリズベーンの蚊、ともに豪州名物なりとの評あれども、秋冷の加はりたるために、蚊軍の襲来を聞か」(23・264)なかった。意外に台湾では蚊にあわなかった。「渡台以来約四十日に達する中全く蚊帳を用ひざりし」(「台湾紀行」35頁)。朝鮮では「今夕も蚊帳を用ひ」ない。これは「気候の冷かなる為に蚊の居らざること」のようだが、「其代りに毒蝶」がいた(「朝鮮巡講第三回〔北鮮〕日誌」96頁、参照)。そして「蚊は少なき方なれども蠅は頗る多し……蟬吟は未だ一回も聞かず」(「朝鮮巡講第一回〔西鮮及中鮮〕日誌」115頁)だった。

## 5.6 温泉保養と健康

円了は若いときから温泉浴を楽しんだ。学生時代は、熱海、箱根の温泉をよく利用した。巡講の疲れも温泉で癒した。旅行記には温泉保養の記事が散見される。「七月、八月の間、半日の休暇なく、炎暑をおかして巡講を継続したれば、心身ともに疲れて綿のごとくなれり。よつて帰宅早々、群馬県の温泉休養を思ひ立ち」(14・176)、伊香保温泉で休養、「終日横臥、夜に入りて按摩を呼」(14・176)んだ。

「身体休養のため東京を發し、その夕、箱根塔之沢鈴木に一泊し、翌朝、小田原より軽便に駕し、

湯河原温泉に入浴す」(15・92)。「南半球周遊の目的を達して帰国し、長途の疲労をいやせんと欲し……豆州熱海に入浴す」(13・323)。「微恙ありて箱根芦之湯および底倉に入浴し、静養を加ふること旬余に及ぶ」(13・105)。「午前九時、新橋着。午後、東洋大学紀念祝賀会に出席す。その後、腸胃病を發し、箱根温泉湯本福住楼に入浴して、滞留週余に及ぶ」(13・555)。

風邪をひいて巡講を延期したこともある。「八丈島、小笠原島を周遊せんと欲し、すでに旅行の準備をなしたるも、風邪におかされ、やむをえず延期する」(13・117)。「腸胃カタルおよびマラリヤ熱を併發」(12・166)し、講演を中止したこともある。またあるときは「医師を呼びて胸痛の診察を請」(13・43)うた。しかし、概して、円了は、巡講中(=旅行中)は健康に恵まれ、元気だった<sup>22)</sup>。

「京城四日間の滞在は非常の多忙を極め、演説に応接に揮毫に殆んど寸暇を容れず、身体疲れて綿の如くなりしも、諸氏の助力によりて幸に健在を得たり」(「朝鮮巡講第一回〔西鮮及中鮮〕日誌」107頁)。「ヘースティングズ滞在一週間にして病氣全快し、いよいよ欧州大陸旅行の途に上る」(23・208)といった具合である。円了は船に強かったが、ただ一度船酔い(しそう)になったことがある。

「海上風つよく波荒く、これに加ふるに雨はなはだし。船体の動揺一方ならず、余はじめて船病にかかる心地せり」(23・208)。なお、円了は、一時期、「脳病」(神経衰弱)を煩っていたが、巡講によりこれを快癒させている。「近ごろは地方旅行のおかげにて、神経衰弱の方は全快した」(13・489)。

生涯、こよなく旅を愛し、旅を続けた円了だったが、大正8年(1919)6月5日、中国・大連で講演中倒れ、翌6日午前2時40分、逝去した。旅に病んでの客死は、あるいは本望だったかもしれない。生前、次のような詩句を遺していた。「南船北馬送生涯……」(15・92)。

## 6. むすび

以上、円了旅行記から円了の観光行動の分析を試みた。その結果、旅行記にみる井上円了の巡講、海外視察旅行は、いずれも「触れ合い」「学び」「遊ぶ」という観光の3要素を備えた「兼観光」(旅行)だった。否、むしろ観光旅行そのものだったといってよい。円了の旅行は、自由な旅行であり、そこには常に「学び」と「楽しみ」があった(そして「遊び」もあった)。行く先々で多くの人と交遊(=「触れ合い」)を重ね、人的ネットワークを拡大した。「触れ合い」「学び」「遊ぶ」を基調とした円了の観光旅行には「楽しみ」があった。とりわけ旅行の最大の「楽しみ」を景観美の鑑賞に措いた。円了は行く先々で美しい自然と触れ合い、その風光を愛でた。同時に訪問地の民俗・風俗の情報収集に努め、著作に著わした。旅行記には見聞した各地の風俗・民俗の観察的な印象・所感が記されている。

国内外各地の見聞はおのずから比較の視座を養う。円了は旅行を通して諸国の地理・人情・物産等に通ずることとなる。それは後年『妖怪学講義』『日本周遊奇談』などに結実、旅行記には鋭い文明批評がさりげなく記されている。また円了は旅先での交遊を通して多彩な人的ネットワークを形成した。これもまた円了にとっては「楽しみ」となった。

このような観光旅行によって円了は広い視野と相対的なものの見方、考え方を身に付けた。それ



は円了の比較文化・文明論、さらには思想形成にも影響を与えている。この点について、本論は深く立ち入ることはできなかったが、円了の旅における「学び」の姿勢に注目したい。

円了が旅行中関心をもった事柄・事物は多岐に渡る。本論で取り上げた事例はそのごく一部にすぎない。他にも興味ある事例がある。いずれも円了の人柄、思想を知る上で多くの示唆を与えてくれる。円了旅行記の分量・情報は膨大な量に及ぶ。それらのより詳しい分析・考察は今後の課題としたい。

なお、円了の超人的な巡講を支え、これを実行しえたのは、効率的な交通利用にあった。とりわけ鉄道の果たした役割は大きい。いうまでもなく円了旅行記に記された交通利用の記述は、日時、天候、発着地など、極めて客観的で信頼性が高い。その行程を分析することで、当時の交通、とりわけ鉄道利用の実態、利用状況が立体的に把握・再現できるものと考えられる。ただ今回、旅行記の分量が多いこともあって詳細な考察はかなわなかった。交通機関は、その時代、地域、あるいは国によって大きく相違する。これらについても今後の課題としたい<sup>23)</sup>。

#### [注]

- 1) 三木 [1985] 67頁、引用、132～138頁、参照。
- 2) 岡本 [2001] 2～5頁、参照。
- 3) 「円了旅行記」からの引用については以下の通りとする。
  - ①井上円了選集からの引用は巻数・頁数で本文中に示す。
  - ②『漫遊記』からの引用はそこに所収された小旅行記名と以下の文献の頁数で本文中に示す。  
井上甫水「漫遊記第一編・第二編」(『井上円了センター年報』Vol.1、東洋大学井上円了記念学術センター、1992年)、93～129頁
  - ③井上円了選集に所収されていない『南船北馬集』中の「満韓紀行」「台湾紀行」「朝鮮巡講日誌」からの引用は当該紀行の題名と初出本の頁数で本文中に示す。すなわち「満韓紀行」は『南船北馬集』第一編(明治41年12月、修身教会拡張事務所)、「台湾紀行」は『南船北馬集』第六編(明治45年4月、修身教会拡張事務所)、「朝鮮巡講第一回(西鮮及中鮮)日誌」と「朝鮮巡講第二回(南鮮及東鮮)日誌」は『南船北馬集』第十五編(大正7年11月、国民道徳普及会)、「朝鮮巡講第三回(北鮮)日誌」は『南船北馬集』第十六編(大正7年、遺稿)からの引用頁数とする。
  - ④上記引用に際して漢数字を算用数字に変えるなど一部表記を変えたところがある。
- 4) 「甫水」は号である。この号は石黒忠憲の提案により出身地の村名「浦」の字を分解したものである。『漫遊記』の原本は手書きのもので、かつ著者自身の独特の字の癖が見られ、略字、俗字等も多く使われている。『漫遊記』の書誌については、三浦・豊田 [1992] 130～131頁を参照されたい。
- 5) 「漫遊」とはあてもなく心のままにあちこちの土地を遊び歩くことをいう。束縛のない自由気ままな旅行である。気の向くまま諸方を回って旅することから享楽的な意味合いを持つ。明治時代は tourist の訳語として「漫遊外人」「観光外人」が当てられた。tourism の訳語に「漫遊」が当てられたこともあるが、「観光」が一般的となった。つまり「漫遊」は「観光」といえる。日本国際観光学会(2007) 18頁、参照。
- 6) 円了は19歳の明治10年(1877)から25歳の明治16年(1883)までの自作の漢詩をまとめた詩集『屈虻詩集』を自筆稿本として遺していた。「屈虻(くっかく)」とは尺虻(尺取虫)が身を屈するさまをいう。新田 [1998] 423～441頁、新田 [1999] 1～18頁、新田・長谷川・中村 [2008]、参照。
- 7) 「西京紀行」に関する漢詩は『屈虻詩集』に収められている。『屈虻詩集』は『漫遊記』執筆の時期と重なる。

新田 [1998] 423～441頁、新田 [1999] 1～18頁、新田・長谷川・中村 [2008]、参照。

- 8) 八木 [2006] 38頁、47頁注4、48頁注21、参照。
- 9) 明治5年、新橋・横浜間にはじめて官営の鉄道が開通した。数年後、大阪・神戸間、京都・大阪間にも鉄道が敷設された。また宿駅・助郷制度が廃止され、東京～高崎間、東京～八王子間、大阪～京都間などで一斉に馬車輸送が開始された。豊田・児玉 [1970] 443～445頁、参照。
- 10) 「三澤」は現在の埼玉県秩父郡皆野町三沢。蛇足ながらここは筆者が高校時代まで過ごした地である。『漫遊記』を読み進めていた時、この地名に接し、ある種の感慨を覚えた。
- 11) 近世になって河川交通は著しい発達を遂げ、物資輸送の一大動脈をなすに至った。商品経済の発達には物資の輸送を活発にし、交通運輸の発達を促した。水上交通の積載量は、陸上運輸、すなわち牛馬に比べてきわめて大きく、また運賃もはるかに安かった。利根川本流などの大河では高瀬船などの大船があった。個々の河川、河岸によって河川交通の具体的様相は異なるが、河川交通はそれのみで単独の輸送路となることは少なく、多くは陸路に連絡し、あるいは海上交通と結びついていた。舟運は陸運に比べきわめて有利であったからできるだけ河川または湖沼を利用し、また海上交通も活用した。例えば阿武隈川では米を河口の荒浜まで運び、そこから海路、銚子まで運び、銚子で川舟に積みかえて利根川を遡り、関宿から江戸川を下って行徳から江戸に達した。なお明治10年には利根川航路に蒸気船「第一通運丸」が就航している。円了も利用したものと思われる。豊田・児玉 [1970] 332～336頁、参照。
- 12) 三浦 (2013b) 37頁、参照。
- 13) 第16編は遺稿集である。
- 14) 「台湾紀行」については、野間 [1999] 19～41頁を参照されたい。
- 15) 『欧米各国政教日記』について以下のような評がある。「ここでは、日録的な性格が徹底的に削られており、ひたすら、西欧宗教事情視察の『報告書』であろうとしている……西欧諸国歴訪から得られた、おびただし宗教事情のデータ、風俗、習慣、遭遇したエピソード、対談要旨などが、雑然と羅列的に報告されている……欧米の宗教現状報告としての体裁を整えているが、各節の内容が整理されているわけではないので、決して読みやすい書物とはいえない。ただこの旅行から円了が得た最大の収穫は、「各国が独自のキリスト教をもち、独自の宗教教育を施していることを発見し」たことであろう。瀧田 [2003] 475～476頁、引用。
- 16) 瀧田 [2003] 479頁、参照。
- 17) 三浦 [2003] 514～515頁、参照。
- 18) 瀧田 [2003] 490頁、引用。
- 19) これに対して円了は「食」にはあまり関心を示さなかった。旅行記には「食」に関する記述がほとんどない。もっとも以下のような証言はある。「父円了には道楽がない。仕事すなわち道楽である……しいて道楽といえは食道楽位だが、これも高級料理ではない。名刺に『わが好きは豆腐、揚げ物、味噌の汁、とはいえ何でも人の食うもの』と刷ってあることでもわかる」(三浦 [2012] 42～43頁、13・68、参照)。また、昭和10年代に哲学堂の堂主だった石川義員氏の談として、ある日、円了から「今日は御馳走をするから哲学堂に来ないか」という誘いがあり、行ってみると、粗末な膳にアジが一匹だけだったという逸話がある。ところが、これとは正反対に、遅塚金太郎氏は、円了からかなりのご馳走(ビール、日本酒、筍ご飯、さやえんどうと大根と牛肉の煮しめ、高級海苔の茶漬け)に預かったという逸話もある(東海林 [2014] 29～30頁、参照)。ともあれ、円了は「食」にあまり関心はなかったというのが筆者の見解である。
- 20) ちなみに秋田県について以下のように回想している。「他県よりここに遊ぶものの最も不便を感ずるは座敷に便所なき一事なり。夜中便所に行かんとするときは、暗を破り雨をつきて屋外に出でざるを得ず。しかるときは数頭の犬群れをなして襲来し、ほへかかりて、まさにかみつかんとするに至る場合あり。故に中等以上の民家にては必ず座敷に便所を置き、洗手所を設けられんことを望む」(14・355)。

- 21) この点に関して円了は次のような見解を示している。「沖縄県は言語、風俗、人情ともに今なほ他府県と大いに異なるところありて、朝鮮、満州を旅行するがごとき感あり……沖縄は従来その国固有の歴史を有したるをもつて、忠君愛国の精神において大いに欠くところあるがごとく感ぜり」(12・284～286)。そして、そのような「遊惰」の克服は「忠君愛国の精神」を涵養することにあるとした。
- 22) 蛇足ながら円了は歯が弱く、痔を患っていた。「腰掛けのなきには、痔持ちの拙者は閉口した……肉はあまり大切に、拙者のごとき歯の弱いものには閉口であった」(23・470)。なお円了は裸眼で月や風景を鑑賞していたから視力はかなり良かったものと思われる。
- 23) 本研究に際し、国際井上円了学会会長・三浦節夫東洋大学教授に貴重なご教示を賜りました。ここに記して謝意を表します。

#### [参考文献]

- 市川義則「井上円了の洋行と日本人の海外移住—民衆教育者としての一側面—」『国際井上円了研究』第1号、国際井上円了学会、2013年3月、158～177頁
- 井上甫水「漫遊記第一編・第二編」『井上円了センター年報』Vol.1、東洋大学井上円了記念学術センター、1992年3月、93～129頁
- 井上円了『井上円了選集』第12巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1997年3月
- 井上円了『井上円了選集』第13巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1997年3月
- 井上円了『井上円了選集』第14巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年3月
- 井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年3月
- 井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年10月
- 岡本伸之編『観光学入門』有斐閣、2001年4月
- 東海林克彦「哲学のテーマパークとしての哲学堂公園—井上円了の哲学の具現化—」東洋大学史ブックレット9、東洋大学、2014年3月
- 白川部達夫『井上円了の全国巡講—旅する創立者 国内編—』東洋大学史ブックレット7、東洋大学、2014年3月
- 瀧田夏樹「解題—井上円了の世界旅行記」井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年10月、473～497頁
- 竹村牧男『井上円了の生涯』東洋大学史ブックレット1、東洋大学、2012年11月
- 豊田武・児玉幸多編『交通史』山川出版社、1970年12月
- 新田幸治「解説—井上円了の漢詩について」井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年3月、423～441頁
- 新田幸治「井上円了の漢詩について」『東洋大学中国哲学文学科紀要』第7号、東洋大学文学部、1999年3月、1～18頁
- 新田幸治・長谷川潤治・中村聡編訳『甫水井上円了漢詩集—「襲常詩稿」「詩冊」「屈蠖詩集」訳注—』三文舎、2008年1月
- 日本国際観光学会監修・香川眞編『観光学大事典』木楽舎、2007年11月
- 野間信幸「井上円了の『台湾紀行』」『東洋大学中国哲学文学科紀要』第7号、東洋大学文学部、1999年3月、19～41頁
- 堀雅通「井上円了の全国巡回講演、海外視察旅行にみる鉄道利用について」『鉄道史学会2014年全国大会自由論題報告要旨』鉄道史学会、2014年10月4日、1～18頁
- 堀雅通「井上円了の観光行動について」『国際井上円了学会第4回学術大会予稿集』国際井上円了学会、2015年9

- 月13日、9～10頁及び当日「配布資料」1～6頁
- 堀雅通「旅行記にみる井上円了の観光行動」『国際井上円了研究』第4号、国際井上円了学会、2016年3月
- 堀雅通「井上甫水著『漫遊記』にみる井上円了の観光行動について」『大学院紀要』第52集、東洋大学大学院国際地域学研究科、2016年3月
- 三浦節夫・豊田徳子「井上甫水『漫遊記について』」『井上円了センター年報』Vol. 1、東洋大学井上円了記念学術センター、1992年3月、130～131頁
- 三浦節夫「解説—井上円了の全国巡講」井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年3月、443～499頁
- 三浦節夫「解説—井上円了と世界」井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年10月、498～519頁
- 三浦節夫『人間・井上円了—エピソードから浮かびあがる創立者の素顔—』東洋大学史ブックレット1、東洋大学、2012年11月
- 三浦節夫 a「井上円了の世界旅行」『国際井上円了研究』第1号、国際井上円了学会、2013年3月、137～142頁
- 三浦節夫 b「井上円了の全国巡講データベース」『井上円了センター年報』第22号、東洋大学井上円了記念学術センター、2013年9月、37～160頁
- 三木清『人生論ノート』新潮社（新潮文庫）、1985年6月
- 八木清治『旅と交遊の江戸思想』花林書房、2006年5月
- 渡辺章悟『井上円了の世界旅行—旅する創立者 海外編—』東洋大学史ブックレット8、東洋大学、2014年3月